

大学図書館と図書館員の将来

総合人間学部整理掛長 篠原俊夫

まったく個人的感慨だが、うかうかと日を送っているうちに三十数年が経過し、自分でも信じられないままに間もなく大学図書館員としての終わりを迎える。もとより大層立派な動機があって図書館員になったわけでもなく、企業戦士としてまっとうできそうもないので、転身したというのが真相であるから偉そうな口をきける立場ではない。たまたま執筆の機会を与えられたので、あくまで私見として大学図書館と図書館員の過去と将来を考えてみたい。

自分の大学図書館員としての履歴は、自分の選択による部分もあるが組織の一員として意志や希望に関わりなく形成される部分もある。これは誰にも避けがたいことで一概にいいとも悪いとも言い難い。私の場合、平均して一つの掛に3年ほどいて異動を繰り返している。整理業務のほうにやや偏りはあるが、附属図書館や医学図書館の運用部門も経験した。文系と理系ということで言えば、文系に偏りはあるが、滋賀医大を含む医学図書館の9年間の経験はある意味で新鮮であった。正直に言えば理系のある種の明晰さ、単純さのようなものが驚きであった。理系図書館を経験することも悪くないという実感があつた。食わず嫌いが恐る恐る食べたものが意外に美味であったというのに似ている。

一般に図書館員が理系の図書館を敬遠したがるのは、主題知識の無さからくる漠然とした不安が原因である。シソーラスに目をくれながら、猛スピードでパソコンのキーを叩くベテラン医学図書館員の姿は文系図書館から移ってきた中年図書館員をして気後れを感じさせる迫力があつた。検索に要する時間が経費として利用者に跳ね返るシステムである以上、如何に素早く能率的に、かつ遺漏なく情報を取り出すかが有能な図書館員たることの証であつた。熟練していなければ、果てしなく経費が加算されそう

なシステムを目前にして、なるほど情報の仲介者としての図書館員の役割は不滅かも知れないと、今にして思えば誠に安易な幻想を抱いていた。私が医学図書館を離れるころにはCD-ROMが普及し始め、同じ内容の検索が時間にせかされることなく利用者自身が、しかも直接の経費負担をせずしてできるようになった。無論、情報のナビゲーターとしての図書館員の役割はより高度なマネジメントの方向に転移したと考えればいいのだから、お役御免というわけではない。ただ、現在の仕事の内容から将来を予測することは不可能であることを実感した。現在の技術を捨得することは必要である。しかし、十分条件を満たしているとは言えない。

芭蕉が俳論のなかで不易流行という言葉を使っていることはよく知られている。一言で言えば、優れた俳句は新しい流行、風俗を直ちに読み込む一面と、ゆるぎ無い伝統を踏まえた一面の両面から成り立つものであり、そのいずれを欠いても俳句としての要件をみださないという意味である。図書館についても同じことが言えるのではないか。コンピューターの進化を見れば一目瞭然だが、技術は予測を超えた速度で進化し、発展する。しかし図書館情報学のバックグラウンドをなす伝統的な理論の裏付けがあつてはじめてトータルな図書館と図書館員像が存在すると言える。時代が変わって技術の表層がどう変わっても変わることのない図書館員のバックボーンをどう形成するか。難しいことだが、先人達が苦闘し積み上げてきたものを誠実に検討し、受け継ぐべきものを正しく受け継いで行くことがなければならぬと思う。ただし私個人について言えば、それができなかったという苦い反省ばかりが残ってしまうのだが、今となっては仕方がない。

(しのはら としお)